

Title	ワンワールドフェスティバル2024「健康は平和の礎」
Author(s)	中村, 安秀; 石上, 美桜
Citation	目で見えるWHO. 2024, 89, p. 6-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98282
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ワンワールドフェスティバル2024 「健康は平和の礎」



日本WHO協会理事長・国際ボランティア学会会長

中村 安秀 (なかむら やすひで)

大阪大学大学院人間科学研究科・ボランティア人間科学教授(1999-2017)。ボランティア活動に関わり、NPO法人HANDS代表、ジャパン・プラットフォーム副代表理事などを歴任。



大阪公立大学大学院 リハビリテーション学研究科 博士前期課程2年

石上 美桜 (いしがみ みお)

日本国際保健医療学会 学生部会 19期代表
聖隷クリストファー大学卒業後、大阪公立大学大学院へ進学。日本国際保健医療学会学生部会16期～現在まで活動中。

1. 「共に生きる世界を～みんなでWaku Waku!～」

ワンワールドフェスティバル(OWF)は1993年から毎年開催している西日本最大の国際協力・交流のお祭りです。市民に広く国際協力の大切さを認識してもらい、活動に参加する機会を提供しようと、関西を中心に国際協力・交流に関わるNPO/NGO、政府機関、国際機関、教育機関、自治体、企業などが協力して開催しています。日本WHO協会は、2019年以来、積極的に参加してきました(写真1)。

2024年のOWFのテーマは「共に生きる世界を～みんなでWaku Waku!～」。

ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエルとイスラム組織ハマスの衝突といった世界的な対立と分断の局面のなかで、持続可能な開発目標(SDGs)の達成のために、「人権を尊重した社会」「だれひとり取り残されない社会」をめざし、共に考え取り組んでいきたいという実行委員会のメッセージが参加者の心に響きました。

2. 国際ボランティア学会とのコラボが実現

日本WHO協会も、実行委員会のメッセージに大いに共感しました。1948

年4月7日に発効したWHO憲章には、「世界中すべての人々が健康であることは、平和と安全を達成するための基礎であり、その成否は、個人と国家の全面的な協力が得られるかどうかにかかっています」(出典：日本WHO協会ホームページ：WHO憲章とは)と明言されています。戦火のなかで多くの命が失われた第二次世界大戦直後の世界の首脳たちが到達した至言です。21世紀においても、アフガニスタン、イラク、東ティモール、スーダン、ミャンマーなど、そしてウクライナやガザ。共感と連帯ではなく、憎

悪と反感の末に分断と戦いが生じ、世界のあちこちで戦禍が同時多発する異常な状況になっています。

私たちは、「健康は平和の礎」であると同時に、平和は健康の礎でもあるのだという、当たり前のことをふつうに語り合いたいと痛感しました。この機会により多くの一般市民の方々にもご参加いただけるよう、国際ボランティア学会との協働企画の形でセミナーを実施しました。国際ボランティア学会から演者を推薦していただき、広報はボランティア学会とWHO協会が協力して各々のルートを紹介



写真1 ワンワールドフェスティバルの会場 (梅田スカイビル)



写真2 司会の中村安秀



写真3 佐々木康介さんの発表



写真4 桑名恵さんの発表



写真5 山田恒夫さんの発表

して実施しました。事前の準備は非常に慌しかったのですが、2024年2月3日(土)午後、大阪市梅田スカイビル・タワーウエスト4階でのセミナー「健康は平和の礎」を開催することができました。

3. WHO 憲章が掲げる「健康は平和の礎」

私(中村)が司会として簡単に今回の企画の目的を説明しましたあと、3人の方のお話をお聞きしました(写真2)。

佐々木康介さん(高知県立大学、国際ボランティア学会理事)は、災害看護学を専攻する学徒として、ウクライナやガザでの死傷者の悲惨な現実と医療機関そのものが爆撃の対象となる異常な状況を報告しました。また、紛争だけでなく、自然災害においても、多くの被害が報告され、とくに、エコノミークラス症候群などをはじめとする災害関連死については、防ぎうる死として十分な対策が必要であるということが強く印象づけられました(写真3)。

桑名恵さん(近畿大学国際学部教授)は、「ウガンダ難民居住区の女性支援の事例からレジリエンス強化のアプローチ」のタイトルで、認定NPO法人ピースウィンズ・ジャパンの難民支援活動を紹介しました。近隣住民の女性たちが家族や生活について相談員に気軽に相談できる場を提供することにより、女性が情報を得て意思決定できる場となり、そのつながりがレジリエンスの強化に結びついていました。ITやアートを応用した若者の力は、社会を変えるパワーを持っていることに感動しました(写真4)。

山田恒夫さん(放送大学教授)は、指定発言として、2024年度からはじまる「情報社会と国際ボランティア活動」の紹介とともに、情報化と国際ボランティア活動は、国際化した21世紀の市民社会の形成に大きな役割を果たすものと期待を寄せられました。放送大学の番組では、国際ボランティア研究のトピックとその実践を紹介し、国際ボランティア活動への理解を深め、自らのキャリアと関係づけ考えられるように企画されている

そうです(写真5)。

4. お互いの雰囲気伝わって対面開催の温かさ

その後、災害時の女性の生理用ナプキンの話題や、能登半島地震に対する心理社会的支援の重要性など、活発な質疑応答が行われました。

2024年は従来の大阪市北区扇町地区から、JR大阪駅北側の「梅田スカイビル」での開催となりました。梅田という大きなターミナルから至近距離なので、買い物や乗り換えのついでに立ち寄る人も増え、利便性は大きく向上しました。若い世代の方や外国人の方も会場に集まっていました。

日本WHO協会ブースには、国際協力の授業の一環で訪問した高校生グループや、シリアに災害支援物資を送った中学生などが訪問してくれました。海外の国際保健医療協力に関心を持つ若い世代が育ちつつあることは大変うれしいことでした(写真6)(写真7)。

セミナーでは、対面で議論することの



写真6 日本WHO協会ブースのクイズの時間は大賑わい



写真7 日本WHO協会ブースに詰めたスタッフの皆さん

大切さを改めて痛感しました。戦争、紛争、災害、平和、権利といった硬い話題ですが、顔を見ながら議論を進めることで、共通点を見出し、互いの違いを認め合うことも可能になるのではないかと感じました。

今後も、イベントでのブースの設置や対面でのセミナーなど、顔と顔の見える関係性のなかで私たちの活動を知ってもらうことに努めていきたいと痛感しました。

5. いくつか他の参加団体のブースをめぐるってみました (報告：石上美桜)

ワンワールドフェスティバルのブース会場では、多くの団体が参加しており、それぞれが様々な想いをもって参加されていました。今回は、一部を紹介させていただきます。

【専修学校クラーク高等学院大阪梅田校】

国際社会に興味を持った高校生が、授業で行った調べ学習の結果を紹介していました。ある1人は、SDGsをもとに、世界の課題について考えていました。何故その目標が設定されたのか、今現在ど

のような状況なのかを調べ、さらには解決策について考えていました。大変だったことを聞くと、「調べていくうちに、日本では当たり前のことでも世界には足りていなくて必要だと欲している人がいるというギャップがあり、想像するのが大変だった。」と、話していました。

ニュースやSNSなどで何気なく目に入ってくる国際社会の情報も、見逃さずに興味を持ち調べている様子にとっても感心しました。今後、このような高校生が国際保健に携わり活躍していったらいいと感じました(写真8)。

【ドイツ国際平和村】

ドイツ国際平和村は、自国で十分な治療を受けられない子どもたちをドイツに連れてきて治療し、治ったら母国へ帰す「援助飛行」という活動を主に実施している団体です。

私は、ここで初めて「援助飛行」という形式での支援を知りました。今まで支援は、現地に赴くことでできるもの、その土地自体をより良い形にすることだと思っていました。しかし、悲しくも戦争が起きている土地では安全が確保できず十分な治療ができていない現状があり

ます。私は理学療法士としてなにか支援をしたいとずっと考えており、このような活動をすることで、少しでも子ども達の未来を守っているのではないかと感じました(写真9)。

【とことこあーす株式会社】

この会社は、～旅を通して人と学びをつなぐ～を理念に掲げ、旅の支援をしているそうです。30カ国、それぞれに移住した日本人にガイドをしてもらうことで、1人で行くよりも、団体で行くよりも様々な体験を実現できるそうです。また、個々に合わせてプランニングも可能で、旅行へ行く前の事前相談も可能なため、安心して旅行へ行く事ができるそうです。私が、特にとことこあーすさんのブースで注目したのは、わずか8歳で世界一周をした少女でした。その少女は世界一周をしている中でいろんな国の人と関わり体験をして、幼いながらも視野を広げていました。幼い頃の経験は、成長してからとても影響してくると私は考えます。この少女のように少しでも多くの人が世界を見る機会ができるといいなと思いました(写真10)。



写真8 専修学校クラーク高等学院



写真9 ドイツ国際平和村



写真10 とことこあーす株式会社



写真11 世界銀行



写真12 大阪高齢者大学校 国際文化交流科

【世界銀行】

世界銀行は発展途上国に低利貸付や無利子融資、贈与を提供しており、これらの資金を活用して、教育、保健、行政、インフラなど幅広い分野への投資支援を行っている団体です。プロジェクトの一部は各国政府、他の多国間機関、民間金融機関、輸出信用機関、民間投資家との共同出資で実施されています。

私はこのような活動をしていると今回のフェスで初めて知りました。あまり知ることのなかった事を学ぶことができ、新たな視点となりました(写真11)。

【大阪府高齢者大学校】

大阪府高齢者大学校は、受講者一人ひとりが「ウェルビーイング」を見つけるきっかけとなるような講座を開講している大学校です。

様々な講義があるなかで、ワンワールドフェスティバルへは国際文化交流科

(多文化国際交流科)の皆様が活動紹介に来ていました。

国際文化交流科では、国際文化や社会課題について学びながら、日本に学びに来ている留学生との交流も多く行っているそうです。留学生との交流では、日本語のコミュニケーション方法を共に学んでいるそうです。その中で留学生の国の文化を学びながら、日本食や習字などの日本文化についても伝えているそうです。

何歳になっても学びをとめない！という気持ちがすごく素敵に感じました。また学びの中で「新たな出会い」や「生きがい」を見つける事ができるというのは今後アクティブエイジングで重要になると感じました(写真12)。

様々な団体が一度に集まることで、それぞれの活動を見たり意見交換を行ったりすることができていると現地に参加し

て実感し、また、自分たちの団体の活動を見直したり、視野を広げたりすることができました。



ワンワールドフェスティバル2024公式ポスター